

報恩講私記（式文）

1 先総礼

次三礼

次如来唄

次表白

敬いて、大恩教主釈迦如来、極樂能化弥陀善逝、称讃浄土三部妙典、八万十二頭密聖教、観音・勢至・九品聖衆、念仏傳來の諸大師等、総じては仏眼所照微塵刹土の現不現前の一切の三宝に白して言さく、弟子、四禅の線の端に、適たま南浮人身の針を貫き、曠海の浪の上に、希に西土仏教の²查に遇えり。爰に祖師³聖人（親鸞）の化導に依りて、法蔵因位の本誓を聴く。歡喜胸に満ち渴仰肝に銘ず。然れば則ち、報じても報ずべきは大悲の仏恩、謝しても謝すべきは師長の遺徳なり。故に、観音大士の頂上には本師弥陀を⁴安じ、大聖慈尊の宝冠には釈迦の舍利を戴きたまう。縦い万劫を経とも、一端をも報じ叵し。如かじ、名願を念じて彼の本懷に順ぜんには。今三つの徳を揚げて、將に四輩を勧めんとおもう。

一つには真宗興行の徳を讃じ、二つには本願相應の徳を嘆じ、三つには滅後利益の徳を述す。伏して乞う、三宝、哀愍納受したまえ。

第一に真宗興行の徳を讃ずというは、俗姓は後長岡の⁵丞相⁶内膳公の末孫、前皇太后宮大進有範の息男なり。⁷幼稚の古、壮年の昔、耶孃の家を出でて台嶺の窓に入りたまひしより已来、

慈鎮和尚（慈円）を⁸以て師範として、顕密両宗の教法を習学す。蘿洞の霞の中には三諦一諦の妙理を窺い、草庵の月の前には瑜伽瑜祇の觀念を凝らす。鎮なえに明師に逢うて大小の奥蔵を伝え、広く諸宗を試みて甚深の義理を究む。而れども、色塵・声塵・猿猴の情、尚忙わしく、愛論・見論・痴膠の¹⁰憶い、弥いよ堅し。断惑証理、愚鈍の身、成じ難く、速成覚位、末代の機、覃び亘し。仍りて、出離を仏陀に誂え、知識を神道に祈る。而る¹¹際、宿因多幸にして、本朝念仏の元祖黒谷聖人（法然）に謁し奉りて、出離の要道を問答す。授くるに浄土の一宗を以てし、示すに念仏の一行を以てす。¹²自爾以降、聖道難行の門を閣きて浄土易行の道に帰し、忽ちに自力の心を改めて、偏に他力の願に乗ず。自行化他、道綽の遺誡を守り、専修専念、善導の古風に任す。見聞の道俗、随喜を致し、遠近の縑素、皆発心す。¹³茲に祖師、西土の教文を弘めんが為に、遙かに東関の斗藪を跋てたまう。暫く常州筑波山の北の辺に逗留し、貴賤上下に対し、て末世相應の要法を示す。初めに疑謗を成す輩、瓦礫荆棘の如くなりしかども、遂に改悔せしむる族、稻麻竹葦に同じ。皆邪見を翻して、悉く正信を受け、共に偏執を止めて、還りて弟子と為る。凡そ訓を受くる徒衆、当国に余り、縁を結ぶ親疎、諸邦に満てり。謗法闡提の輩なりと雖も、彼の教化を聞く者、覚悟、花鮮やかに、愚痴放逸の類なりと雖も、其の諷諫を得る者、惑障、雲霽る。喩えば、木石の、縁を待ちて火を生じ、瓦礫の、釧を磨りて¹⁴珠を為すが如し。甚深の行願、不可思議なる者か。方に今、念仏修行の要義、区まちなりと雖も、他力真宗の興行は

則ち今師の知識より起こり、専修正行の繁昌は亦、遺弟の念力より成ず。流を酌んで本源を尋ぬるに、偏に是れ祖師の徳なり。須く仏号を称して師恩を報ずべし。頌に曰わく、

15「若非釈迦勸念仏 弥陀浄土何由見 心念香花遍供養 長時長劫報慈恩」（般舟讃）

念仏

17「何期今日至宝国 实是娑婆本師力 若非本師知識勸 弥陀浄土云何入」（同）

南無帰命頂礼尊重讚嘆祖師聖靈

第二に本願相應の徳を嘆ずというは、念仏修行の人、之多しと雖も、専修専念の輩、甚だ稀なり。或いは自性唯心に沈みて、徒に浄土の真証を貶しめ、或いは定散の自心に迷いて、宛も金剛の真信に闇し。而るに、祖師聖人、至心信樂、己を忘れて速やかに無行不成の願海に歸し、憶念称名、精有りて、鎮なえに不断無辺の光益に關る。身に厥の証理を彰し、人、彼の奇特を看ること勝計すべからず。加之ならず、來問の貴賤に對して、専ら他力易往の要路を示し、面謁の道俗を誘えて、偏に善惡凡夫の生因を明かす。所以に善導大師の曰わく、²³「今時の有縁相勸めて、誓いて浄土に生ぜしむるは、則ち是れ諸仏本願の意に称うなり」（定善義）と。又曰わく、²⁵「大悲伝普化 真成報仏恩」（往生礼讃）と。然れば、祖師聖人、金剛の信心を發起して自身の生因を定得し、本願の名号を流行して衆機の往益を助成す。豈に本願相應の徳に非ずや、寧ろ仏恩報尽の勤に非ずや。又恒に門徒に語りて曰わく、²⁶「信謗、共に因と為りて、同じく往生浄

土の縁を成ず」と。誠なるかな、斯の言、疑う者も必ず信を執り、謗ずる者も遂に情を翻す。実に是れ仏意相応の化導、抑も又勝利広大の知識なり。惡時惡世界の今、常没常流轉の族、若し聖人の勸化を受けたてまつらずは、争か無上の大利を悟らん。既に一声称念の利劍を揮いて、忽ちに無明果業の苦因を截り、忝く三仏菩提の願船に乗じて、將に涅槃常樂の彼岸に到りなんとす。弥陀難思の本誓、釈迦慇懃の附属、仰がずんば有るべからず。諸仏誠実の証明、祖師矜哀の引入、²⁹憑まずんば有るべからず。茲れに因りて、各おの本願を持ち、名号を唱えて、弥いよ二尊の悲懷に協い、仏恩を戴き、師德を荷いて、特に一心の懇念を呈すべし。頌に曰わく、

31「世尊說法時將了 慇懃附属弥陀名 五濁増時多疑謗 道俗相嫌不用聞」(法事讃)

念仏

32「万行之中為 急要

迅速無過淨土門

不但本師金口說

十方諸仏共伝証」(五会法事讃)

南無歸命頂礼尊重讚嘆祖師聖靈

第三に、滅後利益の徳を述すというは、釈尊の、教網を三界に覆う、猶、末世苦海の群類を濟い、今師の、法雨を四輩に灑ぐ、遠く常没濁乱の遺弟を湿す。彼の在世を謂えば即ち九十歳、³⁵顯宗・密教、³⁶讚仰せずということ莫し。其の行化を訪えば亦六十年、自利利他満足せずということ莫し。在家・出家の四部、群集すること、盛なる市に異ならず。大乘・小乗の三輩、帰伏すること、風に靡く草の如し。終に則ち花洛に還りて草庵を占めたまう。然る間、去んじ弘長第

二壬戌黄鐘二十八日、前念命終の業成を彰して、後念即生の素懷を遂げたまいき。嗟呼、
 禪容隠れて、何くにか在す、給仕を数十箇回の月に隔つ。遺訓絶えて幾の程ぞ、旧跡を一百余
 年の霜に慕う。彼の遺恩を重くする門葉、其の身命を軽くする後昆、毎年を論ぜず、遼絶を遠しと
 せず、境関千里の雲を凌ぎて、奥州より歩み運び、³⁷ 隴道万程の日を送りて諸国より群詣す。
 廟堂に跪きて涙を拭い、遺骨を拜して腸を断つ。入滅、年遙かなりと雖も、往詣挙りて未
 だ絶えず。哀れなるかな、恩顔は寂滅の煙に化したまうと雖も、真影を眼前に留めたまう。悲し
 きかなや、德音は無常の風に隔たると雖も、実語を耳の底に貽す。撰び置きたまう所の書籍、万
 人、之を披きて多く西方の真門に入り、弘通したまう所の教行、遺弟、之を勧めて広く片³⁹ 域の群
 萌を利す。凡そ厥の一流の繁昌は、⁴⁰ 殆ど在世に超過せり。倩つら平生の化導を案じ、閑に当
 時の得益を憶うに、祖師聖人は直也人に匪さず、則ち是れ権化の再誕なり。已に弥陀如来の応現
 と称し、亦曇鸞和尚の後身とも号す。皆是れ夢の中に告を得、幻の前に瑞を視し故なり。況んや
 自ら名のりて親鸞と曰う。測り知りぬ、曇鸞の化現なりということ。然れば則ち聖人、修習
 念仏の故に、往生極楽の故に、宿命通を以ちて知恩報徳の志を鑑み、方便力を以ち有縁無縁の
 機を導きたまわん。願わくは師弟芳契の宿因に依りて、必ず最初引接の利益を垂れたまえ。仍り
 て各おの他力に帰して仏号を唱えよ。頌に曰わく、

41「身心毛孔皆得悟

菩薩聖衆皆充滿

自化神通入彼会

憶本娑婆知識恩⁴⁴（般舟讚）

念仏 ねんぶつ

⁴⁵「直入弥陀大会中」

見仏莊嚴無數億

三明六通皆具足

憶我閻浮同行人

〔法事讚〕

南無歸命頂礼尊重讚嘆祖師聖靈

南無歸命頂礼大慈大悲釈迦善逝

南無歸命頂礼極樂化主弥陀如来

南無歸命頂礼六方証誠恒沙世尊

南無歸命頂礼三国伝燈諸大師等

南無自他法界平等利益

⁵⁰（一四六八）
応仁二年十月仲旬 釈蓮如（花押）